View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

大地は母なり（「現代人と母性」 - 2000年度 学術フロンティア・シンポジウム報告）

著者	橋本 武夫
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	2
ページ	21-25
発行年	2001-07-01
URL	http://doi.org/10.14990/00002859

大地は母なり

聖マリア病院母子総合医療センター所長・小児科医
橋本　武夫

ある大阪の小学校の一年生が書いた作文があります。「お父さんがズボンやぶれとったから、自分で縫うとった。お母さんは横で、買ってきたお菓子を食べとった。何かおかしいやろ」。小学校一年生です。まさにお父さんが母性、お母さんが父性の役をしているわけですけれども、この作文を読んで「この家族が不幸」とか、「子どもがうまく育ってない」とかとは思わないと思います。それは最後の一行、この小学校一年生が「何かおかしいやろ」という文章を一言入れているからですね。一年生ですが、お父さんがやるべきこと、お母さんがやるべきことをやっぱり分かっているんです。おかしな文章なんだけれども、けっこう幸せな家庭の雰囲気が伝わってきます。父性、母性、これでいいんじゃないかなと思えます。

ところで、われわれが騙されていることはたくさんあります。例えば、結婚式でよく、「おしどり夫婦になって下さい」って言いますね。テレビでも離婚が今はやってます。特にタレントさんの離婚がはやってますが、その場合のほとんどに「あのおしどり夫婦が」っていう言葉が使われます。「おしどり夫婦」というのは湖面をいつも二羽で仲良くすいすい泳いでいます。それを見て人間が夫婦仲がいいと考えて、人間の世界の「おしどり夫婦」＝「仲のいい夫婦」となってきたんです。ですが、科学的に生物学者が正しく観察すると、おしどりの連れはしょっちゅう変わってるんです。ですから本当のことを言えば、「おしどり夫婦」というのは「浮気の夫婦」なんです。ですが結婚式ではよく言われますよね。僕らは生物学的にそういうことを知っていますから、おもしろくて笑っているんです。「実はこれ違うんですよ」なんて結婚式で言ったら雰囲気がくずれてしまいますし、それはそれでいいんですが。こんなことが世の中にいっぱいあります。いっぱいあるんです。それでも楽しくて受け入れてやる。これが世の中であり、また、育児ではないかと思うわけです。

今日、「大地は母なり」なんて言葉を大きな言葉を掲げましたが、まさに母性っていったら私からいいますと、まあ母親みたいなものですね。必ずしもすべてがイコールではありません。ですが、踏んづけても踏んづけてもそれを受け入れてくれて、ちょっとの太陽の光と水があるとその割れ目から草が生え、そして花が芽を出す。こんなものが母性ではないかと、個人的には思ってきたわけです。

しかしこの母性というのは、長い歴史のなかでいっぱい研究されてきております。たくさんの論文や研究データが発表されております。また、裁判所の裁判長がこの母性というのをしっかりみて判決文に載せている、そういうものもありま

した。河合先生のお話を聞いていて思い出したんですが、ある女性――この方は独身だったんですが――男に騙されて妊娠したんですね。お金も何も全部使い果たされて、子どもができたとわかったら男は逃げていなくなった。仕方なく、そのお母さんは子どもを産んだ。双子の赤ちゃんだった。そしてその双子の赤ちゃんをついに殺してしまった。その判決のときに、ある裁判長が判決文を出しまして、懲役三年、執行猶予五年。これはすごい温情判決です。二人の何も抵抗できない自分の子どもを殺してしまった。それで懲役三年でなおかつ執行猶予つきですよ。すごい温情判決を下したんだけれども、この裁判長がその温情判決の理由をちゃんと言ってるんですね。「もしこの母親が産まれてすぐこの子どもを自分の傍らにおき抱きしめていたならば、ひょっとしてこの犯行は起こらなかったかもしれない。まだ母性に目覚める前の犯行であったとみなすことができる」。そういう一文を付け加えているんです。すごい裁判長だと思いました。こんなことを裁判所の裁判長が理解しているということに感動しました。すぐ電話したくなりました。本当にこの裁判長、母性というものをそういう見方でみてるんですね。

この裁判長が言ったような母性というのは、歴史的にずっといわれてきました。古くはスイスの分析心理学者ユングが、「大地は母なり」あるいは「グレートマザー」という言葉を使ってます。グレートマザー、偉大な母親。しかしその母性には二面性がある、優しさ、守るという面と、呑み込むという面。この二面性を母性の本質と捉えています。河合先生もやはり母性というものは二面性をもつとおっしゃいました。守護神、守る、産み育てるという肯定的な母性、それから否定的な母性、極端な場合は死にいたらしめるような母性もあるわけです。動物の社会ではよくあることです。敵に子どもをとられないように親が自分の子どもを食べてしまう。呑み込んでしまう。これもある意味で母性なんですね。これは否定的な、呑み込むという言葉でよく表されます。こんなものもあるんです。

フロイトは、「母親は両性にとって人生における最初にしてもっとも強烈な愛の対象である」「お母さんというのは愛の対象である」、と位置づけております。そして「その親子の関係はその後のすべての愛情関係、その原型となる。そしてそれは一生涯変わらない」ということを言っております。愛の原型は母親にあると、心のふるさとが母親にあるということもよくいわれます。

エリクソンという人は、この乳児期の育児を「基本的信頼関係」という言葉で表しました。松尾先生の本には、「大きくなって問題を起こした子どもたちをずっと振り返ってみてみると、乳児期の育児、ものすごく大事だと思われます」と書いてあったんですね。ここでは親子の「基本的信頼関係」というものが大事です。私は胎児から未熟児も含めて、産まれてきた赤ちゃん長くみてきました。松尾先生は大きくなって問題を起こした子をみて乳児期に辿り着いた。ちょうどフィードバックとこちらからいったのとで握手したわけです。エリクソンはまさにこのことを言っています。「基本的信頼関

係」。そしてそのなかで母子相互作用の重要性というものを訴えました。

あるいはボウルビィという人は、「母と子の関係が親密でしかも継続的であって両者が満足し、幸福感、幸せ感をもつことが精神的健康の基盤である」と言っています。モリスはそれに加えて、ボディ・タッチの授乳も含めて、抱いておっぱいを飲ませること、赤ちゃんとの肌と肌の接触を介した、触覚を介した接触、これがきわめて大事である、ということを言っております。

このように歴史をみますと、科学で母性というものを分析しようとする試みがずっと続いてきたわけですが、しかし現代社会においては、最初に述べました小学校一年生の作文と同じように、あまり窮屈な母性というものを考えるよりもその家庭、家庭で考えるほうがいい、と思います。さきほど河合先生も、父親にも母性がある、ということをおっしゃいました。少し昔の歴史上の母性と現代社会における母性というものの考え方、これは変わってきているかもしれません。しかしいずれにしても、これは大事なものではないかと思うわけです。

私は新生児が専門です。ですから周産期のなかで新生児をみているのですが、生理学的にそのいくつかのポイントがありますので、これからちょっとスライドでお示しします。スライドお願いします。

これはもう一目見てわかります。これ母子像というんですけどね。これを見ていやな思いをする人、誰もいないと思いますね。すばらしい。これは実は博物館ではなく、池袋のJRの駅にあります。誰が見てもいいように。好きなんで東京に行くとよくこれを見に行きます。赤ちゃんがお母さんのおっぱいを飲んでいます。このお母さんのうしろにこの子が寄り添っているのが、この像のいいところですね。単なる母子像だったら普通にあるんですけれど、この子がこの像をものすごく引き立ててると思いますね。これを見て母性というものを感じるだけでもいいと思います。

これは家の近くの清水寺の写真です。おっぱいの神様が奉られていて、妊娠しますとお母さんが自分のおっぱいを布でつくってきてここに奉納するんです。「赤ちゃんが元気に産まれますように」と。九割方のお母さんがおっぱいで育てたいと思っているんです。これも一つの母性、原型だと思います。これは大事にしてやらなければいけないと思います。

これは産まれてすぐ直後の写真です。産まれた直後で、しかもこのお母さんは麻酔分娩で産まれたお母さんです。麻酔分娩で産まれたにもかかわらず、赤ちゃんがおなかの上にのって自分でおっぱいに吸いついていくんです。なぜ吸いついていくのかは、なかなか分からなかったんですが、昨年、産まれた直後お母さんの乳首から藤原紀香が出ていることが分かったんですね。フェロモンが出ているということが分かったんです。そのフェロモンのせいで赤ちゃんが乳首に寄っていくということがやっと分かったんですよ。まだまだ神秘的な分からないことがたくさんあります。さきほど裁判長が言

ったように、産まれてすぐこういう場面をそのお母さんが経験していたら、あるいはこの子どもを殺すというようなことはなかったのかもしれない。そういうことを裁判長は言ったんだと思います。

こういう生理が実はあるんですね。これも産婦人科の先生、あるいは助産婦さんにこそ、うんと知っていただきたいんですけれども、まだまだなかなかご存知ない。あるいは知っていても実践して下さらない、そういうケースがあるんです。ですからみなさん、もし赤ちゃんが産まれる時にはこれを思い出してみて下さい。今赤ちゃんが産まれます。産まれ方には問題があります。後で話に出てくると思いますけれども、出産直後お母さんと赤ちゃんの体のなかに、すごい生理が起こってるんです。ちゃんと神様がつくって下さっている。オギャーと泣いた後、赤ちゃんの体のなかにカテコールアミンという物質がワーと出てきます。これは神経を興奮させる、五感を研ぎすましパッと目を覚まして敏感にさせる。味覚、臭覚、視覚などがすごく敏感になる、この産まれてすぐの約二時間を、「新生児覚醒」という言葉で表します。お母さんを認識できるぐらいけっこう目覚めているんです。お母さんも産まれた直後、体にプロラクチンというホルモンがワーと分泌します。これは採乳ホルモン、おっぱいを出させ、母性愛というものを湧き出させるホルモンですから、別名母性愛ホルモンとも言われます。こういう生理をちゃんと神様がつくって下さってる。今まで多くはこれを無視してきたんですね。産まれた直後にお母さんと赤ちゃんを一緒にしてあげる。お母さんと赤ちゃんを一緒にして、離してはいけない。これが大事なところなんです。

これはお母さんが赤ちゃんにおっぱいを飲ませているところの写真です。これもただただ栄養をやってるだけではなく、ちゃんと生理があるんです。哺乳、授乳の生理、赤ちゃんがおっぱいを飲む、飲むことによって消化管ホルモンと中性ホルモンが分泌され、飲んだ後満腹して赤ちゃんは眠っていく。安らぎのなかに抱かれることだけでも気持ちがいい。そして空腹でいらいらしてる。それをおっぱい飲んで安心してお母さんに抱かれ守られて、そして中性ホルモンのおかげで楽になって寝ていく。まさに至福の時、幸せのひと時なんです。一方お母さんのほうにも、授乳するという快感、おっぱいを吸われる、乳首を吸われるという快感がありますよね。こちょばい快感、これは男でもあります。さっき、男でも母性があると言いましたが、男でも実はおっぱいが出てくるんです。乳首をこうして触ってますと、今でもこちょばかゆいんですけれども、一ヶ月ぐらいこうやってますと感じてきまして、男でも乳汁がちゃんとにじんでくるんです。プロラクチンの作用なんです。吸われるとこれが出てきます。さきほどお話した、産まれてすぐお母さんに出てくるホルモンですね。こういうものが出てきて、また授乳のたびに母性、母性愛にしゅっしゅっと湧き出る作用を与えてくれる。そして最後はぱんぱんにはった、満タンにしたおっぱいを赤ちゃんが飲んで空にしてくれた時のあの気持ちよさ。だからお母さんにとっても至福の時なんですね。この至福の時も授乳によって繰り

返すことによって、エリクソンのいう「基本的信頼関係」というのが自然にできてくる。これが哺乳動物というものの一つの生理なんです。だからこの生理を無にする手はない。そういう意味で母乳ということをいってる人たちは、この生理学的なことを含めていっているわけなんです。

「女、これがお母さんになるには子どもを産むだけでは充分ではない。おっぱいを飲ませてはじめてお母さんになる」と昔から文化的、歴史的に言われております。英語でもそうです。「education」（教育、保育）の原点をたどるとラテン語の「educere」という言葉に辿り着きます。educereというのは、ある容器のなかの液体を「搾り出す」ということです。つまり、おっぱいのことです。天の川もおっぱいです。教育、保育の原点もおっぱいに辿り着きます。ですから、一歳まではしっかりおっぱいを飲ませて、しっかり抱いて語りかけること、これが保育の原点です。そのなかで母性というものが、大きく、生理を通して膨らんでくるのだと思います。

これは保母さんが未熟児を抱いているところですが、一ヶ月足らずで未熟児でも模倣動作が出てまいります。こういうこともやっぱり新しい発見なんです。

「抱く」ということ、これが大事なんです。これはもう、科学でも何でもありません。さきほどの母子像と同じです。これを見るだけで母性というものを感じることができると思います。

けれども、これをさきほどのように学問的にあんまりしめすぎると、お母さんが逆にしりごみしてしまいます。逆な面が出てきます。だから私たちは今、母性という言葉に対して「take it easy」という言葉を使います。「がんばりすぎるなよ」「もっと気楽にやれよ」と。母性をあまりにも強制すると、今のお母さんたち、あるいは今の社会に適合していかない面があります。最初の小学生の論文、それでいいと思うんです。ですから気楽に気楽に、しかし周産期においてはそういう生理学的なものが母性のなかの一環としてあるんですよということを、今日はお話したかったわけです。